【調査報告】

評伝　坂本金弥

―実業家編―

坂本　昇

はじめに

明治・大正時代を通じ新聞人や鉱業家、代議士として活躍をした岡山市出身の坂本金弥（以下、「金弥」という）は、地元岡山では憲政の神様と仰がれた犬養毅（号・木堂）と勢望を競った有力者でもあった。しかし、その縦横な生き様と相まって「侠気の男」や「政界の惑星」などと人柄が語られて紹介[1]されることが多い半面、これまで歴史上に位置付けながら金弥という人物を検証した研究は皆無といってよい。

おそらくこの背景には金弥が晩年、経済的苦境に陥った際に財産処分の一環として競売にかけた所蔵品散逸、第二次大戦の岡山空襲で坂本家の関係資料が焼失したことなども関係があるのであろう。そこで今一度、金弥が創刊した「中国民報」（のち山陽新報と合併し合同新聞、さらに改題して現・山陽新聞となった。以下、中国民報を「中民」、山陽新報を「新報」という）をはじめとした当時の新聞や、今では貴重な文献史料ともいえる同時代人による人物誌、評論などを参考に、改めて足跡を編年的に追究することに意を注いだ。はたして金弥は、いつの時期、何を考え、どう行動したのだろうか。

本稿では、実に多彩な顔をもつ金弥人物像の中で、特に実業家としての側面に焦点を当ててみることにする。

一　帯江鉱山入手

金弥が鉱山家として活躍するきっかけとなったのは、現在の倉敷市中庄一帯にあった銅山と関わったのが最初と、『岡山市史（人物編）』などに記されている。慶応元年（一八六五）二月十六日、岡山市花畑の士族、坂本弥七郎と妻・照との間に長男として生まれた。金弥は幼少時、備中の森田月瀬[2]に師事して漢学を学んだ後、天城の静修館、岡山商法講習所[3]などを経て、大阪の仏蘭西法律塾に入り勉学に励んだ。ところが大阪で勉強中の明治二十年（一八八七）、家督を継ぐために呼び戻された。家業の質屋兼古物商だけでは飽き足らなかったのか、家業の傍ら代言人（今の弁護士）となったことが[4]、その後の金弥の人生を大きく左右する転機となった。

坂本金弥
（『岡山県名鑑』）

昭和八年（一九三三）発行の『中庄村誌』〈第五節、鉱業〉の項の中でこの間の事情をうかがう以下のような記述が見られる。

【史料1】

（吉田銅山・猿曳（さるびき）鉱山については）彼（広島県沼隈郡藤江村、山路玖太郎）は岡山市山崎町佐々木善三郎に譲渡し佐々木善三郎は神戸市八田勇之助へ譲渡したるも、割払契約を履行せざるに依り佐々木善三郎は岡山市花畑坂本金弥に権利の回復を依托し、遂にその鉱業権を坂本金弥に譲渡したるものなり

一銅山の鉱業権者の移り変わりを述べた文面だが、金弥が帯江と関わる

ようになった経緯が推察できるもので、この譲渡話の一件以来、鉱山経営に携わるようになっていった。

譲渡話があった日付は定かではないが、おそらく明治二十二年（一八八九）[5]前後と推察される。当時、それまでの政府直営の鉱山は順次民間の有力者、つまり古河をはじめ、三井や三菱などの各財閥へ払い下げが行われた時期であり、岡山県下でも砂鉄製錬に代わって銅鉱の採掘や製錬が時代の旗手として登場し、銅山の試掘や開坑が県内で盛んに行われた時代だった。[6]事実、金弥が関わった中庄一帯でも「明治年代に及んでは付近に於て金盛、金堀、青木、吉田、田中、満寿、金才の諸鉱山を始めとし其の他数個の小鉱山散在し小規模の作業を以て経営せられし」（『都窪郡誌』）といった様子で各鉱山がそれぞれ分立していた。金弥は前述のそれら諸鉱山のうち「吉田、田中、青木、満寿の四鉱山を買収し帯江鉱山と改称」（同郡誌）した。

さらに二十四年に入ると、今度は三菱合資会社（岩崎弥之助社長、現・三菱マテリアル）から帯江鉱山（もとの大栄鉱山と興共鉱山）を「金参千四百円也」で譲り受けた。『三菱社誌』によると、当時三菱側は吉岡鉱山（現・高梁市成羽町吹屋）を本山とし、岡山県内や広島県東部で経営する各鉱山を支山として傘下に置き、本社の指示のもとで事業の統廃合、見直し作業が進められていた。

そのような状況下、吉岡鉱山の十支山中、帯江鉱山を含む弥高や瀬戸など七支山の鉱山が同時売却[7]されることになったもので、うち帯江鉱山を同年六月、金弥が入手したのである。この売り払いについては三菱が帯江鉱山を買収した代金の二割にも満たない金額であった[8]という。

二　帯江経営の近代化

ところで帯江鉱山について注目しておきたい点に、その地理的条件がある。『日本鉱業誌（下）』に帯江銅山の特徴を端的に指摘している。

【史料2】

本鉱山ハ山陽鉄道倉敷駅ノ東一里ナル田野中ノ阜丘ニ在リ京阪地方ニ於テ購入スル用品及芸備地方ニテ購入スル木材ハ鉄道ニ依リ輸送スルヲ得且ツ鉱区ノ西端ヲ流ルル六間川ナル灌漑用河川アリ其下流ハ児島湾ニ通シ十噸内外ノ舟運ニ適スルヲ以テ木材火薬及石炭ハ専ラ舟便ニ依ル

この買収直後には、藤田伝三郎[9]を発起人代表として認可・設立された山陽鉄道がちょうど神戸―福山まで開通[10]している。人里離れた山奥に点在する鉱山が多い中、対照的に吉備平野の沃野の一角に位置し、地理的な好条件に恵まれていたのが帯江鉱山である。山陽鉄道が開通後、生活用品の搬入も一層便利になり、焚き木や石炭、コークスといった燃料類は児島湾から彦崎経由で六間川水路を使い運び込まれていた。

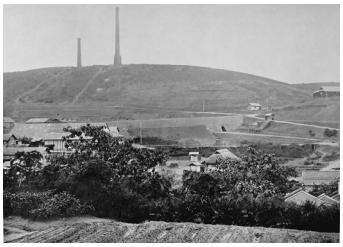
金弥は、こうした帯江鉱山の持つ地理的利点とあわせ、明治二十五年のころ、大胆に近代化を図っていく。

新報の同年八月二十五日付に、その当時の様子が知れる記事がある。

【史料3】

●機械の据換へ　備中国都宇郡帯江鉱山にては溶解分析其の外凡て火を煽ぐには従来の風箱「タヽラ」なるもの使用し来りしかど右は到底間に合わざるより此程之れを廃止し代ふるに蒸気機関のものを据え換へる都合となりしを以て仝機械は阪地に注文中なりしに去る廿一日汽車積にて倉敷停車場に着荷せしを以て直ちに仝鉱山に運搬するとに着手したり

要は、初めて蒸気機械の導入を図り、竪坑には巻き上げ機を設けたり、坑内にトロッコを導入し、精錬も旧式スタイルから洋式溶鉱炉に切り替えた。燃料は木炭から順次コークスへと変更しながら、高煙突[11]も完成させた。



明治43年当時の帯江鉱山
（『陸軍特別大演習記念写真帖』岡山市立中央図書館所蔵）

その後も金弥は近接鉱山を次々と買収・合併し、大規模化を図り一大改革を推し進めていった。新しい技術導入を積極的に取り入れる企業家精神がうかがえると同時に、作業能率も一段と向上したであろうことは容易に想像が付こう。

三　指折りの鉱業家へ

次に図1のグラフで見てみよう。『岡山県統計書』と『中庄村誌』を参考に、帯江鉱山の年産銅採掘高をグラフ化したものである。明治三十年代前半は、二百五十貫足らずだが、多少の増減を繰り返しながら三十四年、三百六十貫程度までに右肩上がりの微増を続けている。しかし、三十七年（一九〇四）を境に翌年から一気に上昇カーブを描き、四十年の千六百七十貫をピークとするまで大幅な増産ぶりである。大きく業績が伸長しているのが分かる。

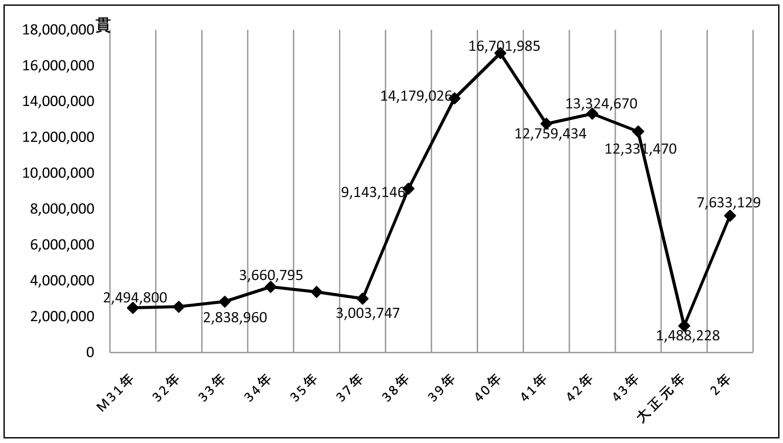


図1　帯江鉱山の銅採掘高

出典は明治31～35年は『中庄村誌』、明治37～大正2年は『岡山県統計書』、明治36年は欠

このため燃料となる焚き木にも事欠くような事態が続いたのであろう。三十九年当時の新報紙面には、帯江鉱山が松丸太の購買を呼びかける広告を連日掲載しているのが目につく。

ちなみに『明治四十年　県統計書』を見ると、県内約八十カ所の鉱山中、帯江鉱山（銅）の採掘高は吉岡鉱山（金銀銅）の千九百七十九貫に次いで二位、製品販売高の價額は帯江五十二万六千九百円に対し、吉岡（銅）五十三万二千五百円と報告されており、両社の生産力はほぼ拮抗している。四十年度県予算額が百九十五万円当時の話である。中国地方で金弥は、指折りの鉱業家へと名乗りを上げ、一躍盛名をとどろかせることにもなったといえる。

帯江鉱山丸太購入広告
（『新報』明治39年10月22日付）

そのころの奮闘を物語る資料類が散見される。まず一つ目は『本邦綿糸紡績史　第二巻』[12]の中で語られる件（くだり）で、金弥の鉱山事業について「他の鉱山からも銅鉱を買入れて大々的に営業し、最も盛大の際には毎日四万円づつの収益を挙げたと称される」という。金額の真偽のほどはともかく、業績拡大の結果がこう表現させているのは間違いない。

二つ目は、森元辰昭・岡山近代史研究会会長から提供を受けた岡山県貴族院多額納税者議員互選人名簿のリストである。それによると、金弥が名簿に登場するのは明治三十七年と三十九年（一九〇六）の二度だが、三十七年は一位大原孝四郎、二位野崎武吉郎、三位土居通信らに続いて、金弥の名前が七位に見かけられる。

このリスト中に登場する人物の多くは地租としての納税額が多い、いわゆる土地持ち・地主階層であり、金弥の場合は、地租よりその他納税額の数字の方が大きくなっている点が特徴的である。今風の言葉に置き換えれば「新興成り金」とでも呼べるような実像がくっきりと輪郭をみせている。

次に三十九年のリストを見ると、

表1　明治三十九年の岡山県貴族院多額納税者議員互選人の名簿一覧表（一部割愛）

氏　名	住　所	納　税　額
坂本　金弥	岡山市古京町	1万1287円37銭
野崎武吉郎	児島郡味野村	8587円43銭
服部平兵衛	邑久郡牛窓町	7864円29銭
伊原木藻平	上道郡西大寺町	7723円32銭
藤田　林蔵	吉備郡足守町	5891円50銭
佐藤　栄八	都窪郡茶屋町	5373円76銭
大橋平右衛門	同　倉敷町	5291円54銭
梶谷芳之亟	同　中州村	4992円17銭
豊福　俊雄	英田郡粟広村	4624円78銭
土居　通博	苫田郡田邑村	4586円58銭6厘

今度は金弥が野崎武吉郎や伊原木藻平、服部平兵衛らと交替し、トップに顔を出している。この時の互選人名簿については新報が明治三十九年九月十九日付、一面で伝えている。参考のため人物とその納税額を拾い出し、一覧表にまとめたのが表1である。

以上のような差異を見る限り、推察できることは明治三十九年前後のこの時代が、金弥にとって実業家として最も華やかな絶頂期であったようだ。

四　晴れの舞台

金弥の羽振りのよい生活の一端が描かれた記事がある。実業界とともに、早くに新聞業界へも進出していた金弥は三十九年三月、それまでの個人経営から鉱業や紡績業など関連諸事業をまとめて坂本合資会社へと組織替えを行う。あわせて同年秋、中民社屋（岡山市東中山下）を新築し、傍らには三階建ての同合資会社も併設した。その新築落成式と合資会社開業披露を兼ね、金弥主催の園遊会、協賛イベントの劇場開放や自転車競走大会が十一月二十三日、岡山市内で開かれた。

当日は披露宴に先立ち、金弥の肝いりで組織した政治団体「鶴鳴会」発会式もあったことから新報は記事をよくフォローしている。このときの様子は二十五日付で報道しているが、「坂本氏園遊会」と小見出し付きの記事では、後楽園会場入り口で金弥、弟の坂本義夫（以下、「義夫」という）、金弥の妹婿・坂本権三郎（同、「権三郎」という）をはじめ、合資会社重役らが勢揃いして両備作三国からの来賓千五百人余を出迎え。園内で午後のひと時、宴を終えた一行は後楽園仮桟橋から「茲（ここ）に予備せる渡船に乗り荒手な

荒手の坂本本邸
（『伊木三猿斎旧邸並故坂本金弥氏旧蔵売り立て毛くろ久』岡山県立図書館所蔵）

る坂本本邸に送られて一味の煎茶に酒後の渇を癒やし夫れより各室に装展せる美術珍玩を縦覧せる」。

記事中の坂本本邸とは前年、金弥が岡山藩筆頭家老、伊木忠澄（号・三猿斎）の下屋敷「伊木屋敷」[13]を新居として買い受けたものだ。数寄を凝らした建物と広い邸内では茶席や模擬店が設けられ、蒐集（しゅうしゅう）品の書画・骨董品の数々が披露された。中には蕪村の山水双幅など金弥ご自慢の逸品もあって、「何れも主人の豪興に公休半日の清遊を尽くせし（中略）傍観者も亦多く近来稀有の盛会なりき」と結んでいる。

『中国民報社誌』によれば、劇場開放は当夜、市内の高砂座と大福座で中民読者らを招待し、自転車競走大会も午前中から平井堤下に新設された大トラックで全国連合自転車大競走会として催され、終日大勢の人波が続いた。

五　繁栄の陰で

しかし、金弥の立身出世ぶりとは裏腹に、帯江鉱山繁栄の陰では負の側面、今でいうところの公害問題が起きていた。

鉱山の町として帯江が〝企業城下町〟の様相を次第に呈するようになってくると、鉱山労働者らの社宅が建ち並び、電気は倉敷の町よりも一足早く点灯し、郵便局までも開局している。

一段の賑わいぶりにつれて地域住民の増加は、行政にとってインフラ整備など新たな懸案が派生してくる。つまり小学校の増改築や診療所開設といった施設の充実・整備などで、鉱山主の金弥はこのような機会を捉え、その都度、村へ個人名や坂本合資会社名で建設資金の寄付も行っていた。『中庄村誌』によると、明治三十一年度の校舎改築で「金一千円　坂本金弥」、就学児童数増加のため明治四十一年（一九〇八）二月に起工した新校舎建設事業の際には「金一千五百円　坂本合資会社」として寄付している。[14]

こうした行為は、いわば事業所側の〝地元対策〟であったのか、当初、煙害による問題は地元でそう騒がれることはなかった。だが、明治三十年代に入り、とりわけ足尾銅山事件[15]が一大社会問題化すると、岡山へも影響は及ぶ。鉱毒反対運動へと地元農民らを駆り立たせ、訴訟問題に発展するケースが目立ってくる。金弥関係の鉱山で新聞が伝える事例を挙げれば、次の【史料4】と【史料5】がそれらである。

【史料4】

新報　明治三十四年九月二十日付

●帯江鉱山と烟毒　都窪郡帯江村帯江鉱山は近来益々隆盛に赴き工夫八百余人を使役して盛に採掘製鉱に従事し尚事業拡張の為め工場を増築せしが（中略）而して同鉱精煉所数拾ヶ所建立以来同地以西の農作物は固より山中の樹木雑草に至る迄其煙突より日夜絶えず吐出する悪臭煙（硫黄臭）の為め重大なる害毒を被り山中は殆ど焼山の如く禿げ田畑の豊作物は或は枯死し或は発育を妨げられ稲作蕎麦及甘藷等の如きものに至りては凡そ毎年二割方以上の収穫を減ぜりといふ

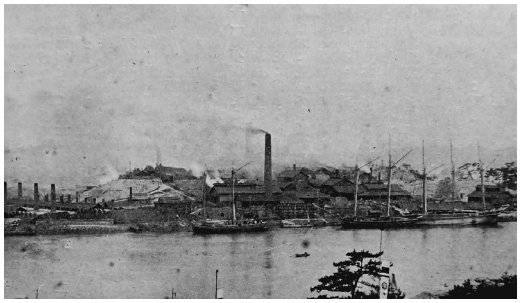
【史料5】

新報　明治三十六年七月十日付

●鉱毒事件の控訴　当市坂本金弥氏の所有にかかる小田郡三谷村字大渡の弥高山鉱山より流出する鉱毒三谷村大字横谷の農作地に害を與ふること少からずとて村民岡寿一郎氏外百二十七名より坂本氏に向つて損害賠償三万九百四十二円八十八銭を請求したる事件は曩（さき）に当地裁判所にて審理の末事件の一部たる請求の原因に付き至当なりとの判決を與へたるが坂本氏は之に服せず控訴せしかば大阪控訴院民事三部の擔任となり（以下略）

金弥はこうした公害問題があって明治四十二年春、岡山市宝伝の瀬戸内海沖合に浮かぶ犬島へ製錬所を移転[16]することになった。その犬島へは当時、岡山から人車で三蟠港へ向かい、海路を取ること都合二時間ほどの至便の地である。

同製錬所は金弥の弟で三十九年、京都理工科大学機械科卒の坂本鑒四郎（以下、「鑒四郎」という）が建設に当たり、同じ年に東大応用化学科を卒業した工学士、武藤與作が技術管理者として創業当初から金弥の事業を助けたという。こうした経緯も明治四十四年十一月発行の『岡山県名鑑』の中で触れているが、工場の能力は「一日約四万貫の鉱石を処理し得、而して鉱炉のみ増築すれば目下の能力の二倍迄直ちに増加し得る様に元動機其他の設備を完備せり」と記す。



往時の犬島製錬所（『岡山県名鑑』）

六　幅広い事業展開

これまでの動向は、主に帯江鉱山との関わりで述べてきたが、金弥が鉱山経営をしていたのは、実は帯江だけではない。先の裁判記事に見られる弥高鉱山は明治二十七年、赤木佐太郎から譲り受けて「二三年採鉱せし後休山、後弥高鉱業株式会社の稼行する所」（『増訂　小田郡誌　下巻』）となった銅山であり、金弥の鉱山関連グループ会社としては以下、【史料6】で分かる通り、坪井鉱山や坂本コークス製造所、久原炭坑なども存在していた。

【史料6】

岡山市東中山下	坂本本店
岡山市船着町	坂本支店
美作津山駅前	坂本支店
筑前若松海岸通三丁目	坂本出張店
大坂川口	坂本出張店
備中都窪郡中庄村	帯江鉱山職員一同

美作久米郡坪井　坪井鉱山職員一同
児島郡日比村　坂本コークス製造所
筑前　久原炭坑職員一同

【史料6】は、中民の明治三十九年元日付、二十八ページ特集紙面で扱われた年賀の名刺広告である。これら関係先が金弥全盛時代の坂本家を中心とした事業所一覧なのであろう。指折りの鉱山家となり、岡山に本店を構え、支店を大阪に置いて、ますます隆盛を誇っていったのであろう。

金弥が触手を伸ばしたところでは筑前（現・福岡県北西部）の久原炭坑のほか、今は大分県大野市となっている尾平鉱山[17]でも十数年経営に関係した。また、発起人の一人としての会社設立に関わった備前陶器株式会社（明治二十九年三月創業、現・備前市伊部）や、同じく三石クレー株式会社（同年七月創業、同市三石）が興ると、権三郎が同社取締役として参画している。

七　時代の波に翻弄

わが国では明治二十年代後半から三十年代にかけ企業活動が活発化し、勃興期の真っただ中にあったとはいえ、これだけの事業展開、拡張に挑んでいけたことは注目に値する。そして、確かに鉱業家としての金弥は、一定の評価も受けている。

【史料7】

新報（筆者要約）　明治四十一年七月二十五～二十八日付（内三回連載）

「わが国では石炭と銅が最も主要な鉱産物であり、岡山県の鉱産物総価格は百四十一万五千円（明治三十九年度）で全国各府県中で十三位、鉱業に従事する人数は四千四十人」と概観し、近年「岡山県の鉱業発達の為に誠に喜はしきは瀬戸内海の海岸に小規模ながら中央精煉所的なものが数多建設せられたること是なり」とした上で、水島精煉所や小串精煉所、そして目下建設中の犬島精煉所の存在を挙げながら、

「岡山県に在りては坂本杉山両氏（岩三郎、18）の如き実験家あり新進気鋭なる坂田貢氏の如きありて鋭意鉱業に従事しつつあるは吾人の意を強うする所なり」

冶金学の大家、斎藤大吉・京都工科大学教授[19]にインタビューし三回連載企画にまとめた「鉱業の趨勢（附岡山県の鉱業）」の中で、前述のような見方が紹介されている点は興味深い。

とはいえ、金弥が生きてきた時代は日清、日露両戦争を挟み、戦争の反動不況に揺れ、企業活動も世の中の浮き沈みに大きく左右された。なかには再起不能と思われるような痛手を負った出来事もあった。

浮沈の激しかった例として、少し時代は遡るが明治二十九年（一八九六）三月、地元経済人らが合同して設立した備前紡績（現・岡山市下石井、社長・大森馬之）と、御野（みの）銀行（同所、代表者・亀山猪之助）の両ケースが知れる。社長、代表者の名前はともに別人となっているものの、主導権は金弥が握っていた「坂本の会社」であったため、中民紙面では備前紡や御野銀の設立に至るまで一連の経緯を事細かく以下のように伝えている。

例えば、御野銀についてみると、「株金三万円の計画なりしを賛成者多きが為五万円と為し、今明日中に其筋へ設立届出を為す由、因に記す同会社の発起人は保島善次、河合兵吉、西原藤次郎、新鉄道、星島丈吉、船橋清次、坪田平太郎、岡崎筈吉、亀山猪之助、小橋菊太郎、小合正隆、中野寿吉、佐藤伊市、沙田初次郎、安井底二氏等二十五名なりと」（明治二十八年八月三日付）。

また「愈よ昨日本県庁へ届立てたり、因に記す同銀行は御野郡石井村大字上出石岡山停車場中筋に設立する筈なりと」（同年八月二十二日付）などである。掲載された発起人名の羅列も当時、豪農や平民をはじめとした地元有力者とおぼしき人たちである。

かたや金弥の関わった備前紡績が岡山市内で岡山紡績に次いで設立されたのは、先に触れた二十九年三月のことである。当時は日清戦争後の好況期で、企業熱も目覚しかったころだった。このため備前紡は、起重機を紡

績工場に初めて使用・導入した上、「寄宿舎を建て蓄音器を置き動物の標本室を作り」（『本邦綿糸紡績史　第七巻』）職工教育を開始するなど、新機軸を出した企業経営で、その船出もさほど困難なものではなかったという。

だが、その後県内三大紡の一つ、玉島紡績（現・倉敷市玉島）が反動不況のあおりで明治三十二年九月破産すると、大口債権者であった金弥にも火の粉が降りかかる。『同紡績史　第二巻』によれば、「玉島紡績の建物機械は明治参二年公売処分に付せられ、二十二万五千円を以て坂本金弥氏に落札となつた」。結局金弥はこの玉島紡績を買収し、備前紡績の傘下として玉島紡は再スタートを切ることになった。

そして産業界のみならず、金融界も世の中が貸出金の焦げ付きや取り付け騒ぎで騒然としてくると、県下銀行界は深刻化する。ついには玉島紡倒産から二年後の三十四年（一九〇一）七月、杉山岩三郎や香川真一らが実質的に経営に当たっていた岡山で最大規模の二十二銀行が経営不振に陥り、安田銀行（本店・東京）の支援を受ける事態を迎える。[20]

設立間もない御野銀行にとって、こうした事態はさらなる打撃となったようで、最終的に同行はその年、臨時休業（八月十七日）、破産宣告（同月二十六日）へと追い込まれていった。御野銀行の破産は県内で最初の銀行破産となり、岡山市民の不安を煽ることにもなった。

東京・二六新報創刊者で、金弥とは「生涯の盟友」として同志的関係にあった秋山定輔[21]が、存命中に口述した『秋山定輔は語る』（昭和十三年十一月発行）の中で、この間の金弥の動向を興味深く語っている。少々長くなるが、的を射た語り口と思えるので引用しておく。

【史料8】

彼（金弥）はまた極端な悲境に沈んでしまつた。それは前に鉱山が余りよくなつたところから、他の事業に手を伸ばしたのが失敗の原因だった。就中岡山県の玉島紡績を全部一人で引き受けた。が慣れぬ事業である。間もなく大暴落に遭つた結果、大欠損、（中略）六七十万の大負債をしょひ込んで、（中略）彼は全く其の時代の風変りな若い鉱山師、山が中つて慣れない紡績事業、百万近い大負債で極端な大破産だ。もうかうなると誰も相手にしない。此の男が後日再び成功して、関西財界の重鎮になろうとは誰が其の時想像し得よう

八　不遇時代の余波

以上、金弥の足跡をたどると鉱山事業に手を染めた当初、苦労の末に徐々に産額を上げ、次に食指を動かした紡績・金融業で深手を負いながらも、懸命に挽回を図った―ということになる。

このように浮き沈みの激しかった金弥の明治三十年代であるが、新聞界で互いにライバル関係にあったのが中民と新報である。当時は新興勢力・中民（明治二十五年七月三十日創刊）に対し、古参・新報（同十二年一月四日創刊）という図式。激しい販売合戦と同時に、厳しく対立し紙面競争を繰り広げていた。なかでも御野銀行破綻の際の紙面展開[22]などをみると、勢い新報記事はその動静を鋭く追跡取材している。次の記事は臨時休業から破産宣告へと至る間のもので、まさに好事例の一つであろう。

【史料9】

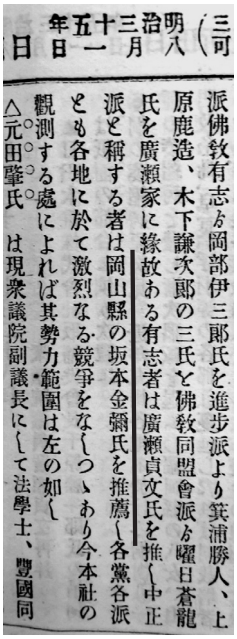
新報　明治三十四年八月二十四日付

●御野銀行重役の奔走　昨今は各重役は只管調金の為め東奔西走なしつつあり中にも阪（坂）本頭取は一昨々日も上阪中なる中野寿吉氏と協議せん為上阪したるが今同行を開店せんには少なくも十万円の金を調達せざる可らざれば四週間内に開店を見る事到底覚束なかるべしと云ふ

明治三十一年以来、通算で七回代議士を務めた金弥にとって、この御野銀行倒産や紡績事業の失敗は、考慮せざるを得ない何か事情でもあったのか。翌三十五年八月十日行われた第七回衆院議員総選挙では、地元岡山か

らの出馬を見送り、代わりに中民主幹や社長を務めた義夫が郡部候補者として立った。

そして金弥自らは、鉱山経営で縁のある大分県から立候補している。同年八月一日付、大分・日田新報には、地元の「中正派と称する者は岡山県の坂本金弥氏を推薦」して、各党各派が選挙戦を戦っている選挙情勢の記事を伝えている。だが、このとき義夫は岡山で当選したものの、金弥の方といえばこの七回と第八回の二回連続、大分で落選の憂き目をみた。まさに弱り目に祟り目である。中央政界に金弥が返り咲くのは二年後の第九回総選挙まで待たなければならなかった。


（明治三十五年八月一日）
三可派佛教有志ゟ岡部伊三郎氏を進歩派より箕浦勝人、上原鹿造、木下謙次郎の三氏と佛教同盟會派ゟ曜日蒼龍氏を廣瀬家に縁故ある有志者は廣瀬貞文氏を推し中正派と稱する者は岡山縣の坂本金彌氏を推薦し各黨各派とも各地に於て激烈なる競爭をなしつゝあり今本社の觀測する處によれば其勢力範圍は左の如し
△元田肇氏は現衆議院副議長にして法學士、豐國同

第七回衆議院選の選挙情勢を伝える大分『日田新報』の記事
（大分県日田市立淡窓図書館所蔵）

さて、今まで述べてきたように金弥は何足もの草鞋（わらじ）をはき、多彩な顔を発揮しながら各方面で東奔西走した。おそらく席の温まる間もなかったと思われるが、義夫や鑒四郎、権三郎らの身内が後顧の憂えなきよう金弥の活躍を陰で支えていたのであろう。また、帯江鉱山の鉱毒問題の際、地元民と金弥の間に立ち仲介の労を取った倉敷の重鎮・林醇平のほか、金弥の信頼が殊の外厚かった中野寿吉や帯江鉱山鉱長・支配人として切り盛りした小川熊治ら実に数多くの知人や友人、それに支援関係者が存在していたことは見逃してはならない。

結びにかえて

今回の小稿では明治四十年代以降の動向について、ほとんど触れなかった。というのも、この明治後半期から晩年の大正時代にかけ、金弥の動向はさらに大きく揺れる。鉱山業からの撤退をはじめ、中民の倉敷・大原家への身売りや、護憲運動による第三次桂太郎内閣の倒壊、つまり大正政変における金弥の政治家としての立ち位置など。そこには多くの「物語」が隠され、しかも幾つかの「謎」が残されているように考えている。そのため次回は、新聞人・政治家としての金弥像を検証し、他日の機会に稿を改めたいと思っているので、ここでは残る課題について二、三の指摘をしておく。

まず、九州地方でのより詳細な金弥の事績とあわせ、秋山定輔が語っている金弥復活後の「関西財界の重鎮」とは一体いかなる金弥だったのか。その具体的な動向や、金弥と関わった地元・中央政界の同志をはじめとした人物群との関わりは。そして鉱山業者として一定の評価を受けた金弥の事業は、岡山県鉱業史[23]の中で、どのような意義付けが出来るのだろうか―のような点である。

なお、将来的に「中民三代　坂本金弥・義夫・権三郎」としての検証を予定しているため、本稿ではその手始めとしての素描となるよう心掛けた。今後とも金弥関係の一次史料発掘とあわせて、さらに事績の追究を続けていきたいと願っている。

〈追記〉執筆に当たって山陽学園大の故太田健一名誉教授や岡山近代史研究会の方々にアドバイスを受けたほか、岡山県立記録資料館、岡山県立図書館郷土資料室の館員ら多くの人の手を煩わせました。ここに報告し、感謝の意を表します。

〈注〉

（1）市史編集委員会『岡山市史（人物編）』一九六八年。吉井親一編『近世岡山県先覚者列伝　故人百聚』一九五六年。田中誠一編著『備作人名大辞典』一九

三九年など。

(2) 備中庭瀬藩医で漢学者。兄は節斎。公務の傍ら塾を開き、弟子は三千人に及んだという。

(3) 一八七八年、県庁在籍の小松原英太郎（のちの新報主筆、文部大臣）らにより設立。岡山市内を中心に郡部の青少年らが経済や簿記、算術など学んだ。初代所長は箕浦勝人（のちの逓信大臣）で、金弥はその一期生。

(4)『岡山市史（人物編）』では金弥が直接代言人として活動したとは触れてないが、ここでは『岡山県歴史人物事典』（山陽新聞社）などに依拠した。

(5) 大正二年（一九一三）発行の『時事評論』（国立国会図書館蔵）掲載の〈帯江銅山と阪（坂）本金弥〉では明治二十二年経営との記述が見られる。

(6) 県史編纂委員会『岡山県史　第十巻　近代Ⅰ』一九八五年。五六三～五六四頁。

(7) 帯江鉱山以外の他の支山名は以下の通り。笹ケ畝（川上郡）、瀬戸（英田郡）、弥高（小田郡）、大桐（上房郡）、樫村（真庭郡）、青瀧（広島県神石郡）。売却代金は帯江三四〇〇円～大桐、樫村の各五〇〇円。

(8) 市史研究会『新修倉敷市史　第五巻　近代（上）』二〇〇二年。四八九頁。

(9) 山口県出身の藤田伝三郎は、大阪で藤田組を設立。秋田県・小坂などの官営鉱山の払い下げを受け、土木や鉱山業を営んだ。岡山県内では児島湾干拓や柵原鉱山、片上鉄道など事業を行った。

(10) 今のＪＲ山陽本線の前身で、明治三九年（一九〇六）当時の国鉄が買収。二四年、岡山に初めて陸蒸気がお目見えし、同年三月、三石―岡山間、引き続き同年四月末、岡山―倉敷間、同年七月までに笠岡まで開通した。

(11) この煙突については、在間宣久氏が児島虎次郎「酒津の農夫」と帯江鉱山のタイトルで『倉敷の歴史』第七号の中で触れている。

(12) 日本綿業倶楽部が絹川太一著作により昭和一二年（一九三七）から順次、刊行。第二巻に玉島紡績の項があり紹介されている。二〇四頁

(13) 岡山旭川河畔の相生橋東詰めにあった伊木忠澄の下屋敷を一万七千円で購入したとされている。

(14)『中庄村誌』（一九三三年）は中村常三郎編で、同誌の第八章　第二節、初等教育の二〇四頁と同二〇六頁。

(15) 古河鉱業の主要銅山である足尾鉱山（栃木県）は稼業時、愛媛県・別子、茨城県・日立、秋田県・小坂、同県・尾去沢とともに、わが国の代表的な銅山であった。明治二十年代に最盛期を迎えた急激な銅山開発で下流地域に深刻な公害を引き起こし、一大社会問題となった。日本の「公害の原点」と言われている。『日本大百科全書』一九八四年など。

(16) 犬島の銅製錬所移転時期はまちまちに伝えられている。『岡山県史（年表）』が明治三八年、『岡山市史（人物編）』が四十年とするなどであるが、ここでは四十二年春の稼働説に従った。

(17)「尾平鉱山誌」編集事務局編『尾平鉱山誌』（緒方町立歴史民俗資料館発行、二〇〇四年）によると、金弥は「明治二十八年ごろ、愛媛県宇和島の人、都築温太郎から一万六千円で購入。十数年間、経営したが採算の取れない借区稼業であったのか、明治四十一年、大分県南海部郡の井上平吉に譲り渡している」と記述している。

(18) 岡山藩の人で、明治時代を代表する実業家。当初官吏として働いたが、明治五年（一八七二）に辞任し、以後実業界へ転身した。鉄道、金融、窯業、電灯など岡山財界への貢献ぶりは、人呼んで「備前西郷」とも称された。三十八年（一九〇五）設立の日本製銅硫酸肥料株式会社は本社を船着町、工場を小串に設けた。

(19) 京都大学教授（工学博士）、専攻は採鉱冶金学。都窪郡福田村（現・岡山市南区）出身で、明治五年十一月生まれ。

(20) この間の岡山県下金融界の動向については、『中国銀行五十年史』の「岡山県内の銀行の取付けと破綻」（九〇～九五頁）で詳しく述べられている。

(21) 倉敷市阿知出身。金弥とは秋山定輔が東京帝国大学法科を卒業した明治二十三年、岡山で偶然巡り合い、意気投合した。『秋山定輔は語る』の中で、「当時の彼は頗る年少気鋭、初めて遭った時からお互いに天下国家の話、新聞事業の話、何につけても坂本は唯一の共鳴者だった」とも振り返っている。

(22) 新報「御野銀行重役の奔走」以外の記事では、明治三十四年八月二十七日付「御野銀行の破産決定」、同九月一日付「御野銀行の破綻と銀行界」など掲載。

(23) 先学の研究として『帯江鉱山とその周辺の地域社会　第1・2集』（池田陽浩氏）や『吉岡銅山の歴史概要』（小西伸彦氏）などの著述がある。その他、金弥については元山陽新聞記者二人の著作「瀬戸内の経済人」（赤井克己氏）と「岸田吟香と明治岡山の新聞人」（佐藤豊行氏）の中でも触れられている。

（さかもと　のぼる　当館利用者）

坂本金弥略年譜

西暦	和暦	年齢	実業家関係の主な事項
1865	慶応元	1	2･16、岡山市生まれ
1887	明治20	23	父・弥七郎の営む質屋兼古物商を継ぐ
1888	21	24	
1889	22	25	入江武一郎らと岡山で政治団体「鶴鳴会」を結成
1890	23	26	代言人としても活動。秋山定輔と出会う
1891	24	27	鶴鳴会を備作同好倶楽部と改称、西村丹治郎ら加わる。月刊雑誌「進歩」発行。６月、三菱合資会社から帯江鉱山買収
1892	25	28	7･30、日刊新聞「中国民報」創刊し、社主となる。帯江鉱山で新鋭機械を導入
1893	26	29	帯江鉱山の機械化進む
1894	27	30	帯江鉱山の溶鉱炉煙突完成。7･8、岡山小橋町で県下対外硬派大懇親会に出席。7･10、尾道で対外硬派演説会と同懇親会に木堂らと同行出席。7･13、岡山市上西川町189番邸へ転居（中民7･13付）。7･21、上房郡高梁町で備北４郡対外硬派大懇親会に出席弁士として出席
1895	28	31	金堀鉱山買収。28年ごろ、愛媛・宇和島の都築温太郎から尾平鉱山の借区購入。8･3付中民、備前陶器株式会社の発起者に木山精一、林醇平らと一緒に設立届中。8･11、西中島町・旭座で中国進歩党政談大演説会の弁士の一人に。9･8付中民、金弥が備前紡績の創立委員に
1896	29	32	２月改選　県会議員。3･10、御野郡石井村で備前紡績設立、引き続き御野銀行も設立。７月、金弥の弟・義夫が同志社卒業、中民編集局主幹となる。7･5、三石クレー株式会社が設立
1897	30	33	4･8、石井十次が金弥を訪問
1898	31	34	3･15、第５回衆議院議員総選挙の第１、７区で同時初当選。金才鉱山買収。8･10、第６回衆議院議員総選挙で一区から選出
1899	32	35	中民社長名義を中野寿吉に変更。９月、玉島紡績所破産。債権者・金弥の手に渡り、10月、吉備紡績株式会社として操業継続
1900	33	36	中野寿吉、中民社長を辞し、いったん金弥に復す。２月、秋山定輔が二六新報再刊。復刊当たって金弥は当分の間、「月々２千円送金」し、あわせて輪転機も提供
1901	34	37	中民社長、さらに義夫に変更したが衆議院議員候補者として出馬のため、義弟の権三郎が中民三代社長に就任。8･一、井原、玉島共益、御野の各銀行で金融恐慌起こる。
1902	35	38	父・弥一郎没。金弥の事業、また好転。第７回大分県衆議院総選挙（8･10）で大分・中正派が金弥推薦したものの、落選
1903	36	39	3･1、第８回衆議院選挙で大分県から再び出馬、落選。第５回内国勧業博覧会で２、３等賞牌を受領（7･1） 12･10、東京芝桜田本郷町で桜田倶楽部の発足式に出席
1904	37	40	3･1、第９回衆議院議員総選挙で犬養毅、竹内正志らとともに当選。政治団体「桜田倶楽部』結成
1905	38	41	8･20、孫文らの「中国革命同盟会」設立大会が東京赤坂区、金弥邸で開かれる。12･29付中民に古京町８番地（荒手屋敷）へ移転広告
1906	39	42	弥高鉱山鉱毒訴訟で岡山地裁敗訴、直ちに控訴。金盛鉱山買収。9･19付新報、多額納税議員互選者で一位に。11･23、岡山市東中山下、中民新社屋が完成、落成式と坂本合資会社（３月創立）開業披露を兼ね園遊会開く。併せて劇場開放、自転車競走大会など催す。１１月、進歩党から別れ、鶴鳴倶楽部を組織
1907	40	43	4･1、岡山紡績、備前紡績、南海紡績（和歌山県）を絹糸紡績(本社・京都）が合併。7･2、帯江鉱山で労働争議起こる
1908	41	44	第10回衆議院議員総選挙（5･15）で当選。倉敷紡績が吉備紡績を買収
1909	42	45	３月、犬島製錬所が稼働
1910	43	46	5･29、鶴鳴会解散し、立憲国民党岡山支部が発足
1911	44	47	5･18、大隈重信、渋沢栄一ら一行が来岡、歓迎会に臨むとともに、同夜、大隈は金弥邸に宿泊
1912	大正元	48	藤田組へ帯江鉱山と犬島製錬所の売却を申し出。5･15、第11回衆議院議員総選挙で当選
1913	2	49	第３次桂太郎内閣誕生を機にした大正政変で犬養毅と袂を分かつ。3･15、中民経営は坂本家から大原孫三郎に移る。備前紡績の株もこの時、大原家へ。11･27、坂本合資会社は帯江鉱山と犬島精製錬所を藤田組へ譲渡（135万円）
1914	3	50	6･22、幹事長と議員の辞表提出
1915	4	51	3･25、第12回衆議院議員総選挙で当選（金弥応援のため犬養毅、選挙投票入口に現れる）。この時の様子は中民が号外発行で報道
1916	5	52	6･10、金弥邸で東京・金子亀五郎氏を招き、喜多流謡曲会。6･10付中民、金弥が「伊達家所蔵の磐城文琳、５万６千円で落札」の記事掲載。9･21、合資会社藤田組が柵原鉱山買収
1917	6	53	4･20の第13回衆議院総選挙で当選。７月、犬島藤田組製錬所の煙害で地区住民が会社へ交渉
1918	7	54	磐城文琳、京都・永昌堂が15万６千円で落札
1919	8	55	代議士を辞職し、政界から引退。藤田組の帯江銅山は操業停止、犬島精錬所の休業
1920	9	56	
1921	10	57	
1922	11	58	3･20、　東京美術倶楽部の坂本金弥氏所蔵品入札が行われる
1923	12	59	9･1、関東大震災で被災。病躯をおし横浜から船で兵庫県垂水の別邸に移り、静養。翌10月22日、死去

＜注＞　年齢は数えで表記